

豚改良増殖推進委員会の概要について

1 日 時

平成19年9月14日(金) 13:30~17:00

2 場 所

独立行政法人 家畜改良センター講堂

3 出席者

委 員(別紙参照)

4 議事概要

委員会の座長に木下委員が選出され、事務局からの資料の説明に続き、今後の家畜改良センター(以下「センター」という。)における豚改良増殖に関する業務の推進方向等に関して議論が行われた。

今回、家畜改良センターの新たな取組として示した「広域系統造成検討会」の立上げ案については、委員から、その方向性について概ね適当である旨の意見が得られた。また、本件も含むセンターの業務に関して以下のような発言があり、今後、センターにおいてこれらの意見も踏まえて業務内容を検討していくこととなった。

(1) センターの業務について

センターにおいてオーエスキー病(AD)等の疾病問題が一度起こると、種畜・精液供給業務に対する信頼性は大きく下がる。精液の供給に関しては、利用者を安心させるためにも、PCR等により衛生状態を確認する必要がある。

造成した系統について、センター宮崎牧場、茨城牧場だけでは配布に不安があり、危険分散する必要がある。センターの他牧場をはじめとして、県・民間を含めて維持・増殖する体制を検討すべき。

雄型系統は国(センター)から確実に供給してほしい。ただしAD清浄地域で生産されたものに限る。育種(系統造成)を行う場所と維持を行う場所は別でもかまわない。AD清浄地域で雄ステーション(増殖施設)を設置すればよい。

(2) 育種資源の確保、供給等について

過去に生産された精液等育種資源を確保しても改良を進めることにはならないので、改良が進んだ新しい育種資源(系統豚)の精液を保存・収集して全国で利用できる体制の構築が重要である。

保存する資源としては、能力が高いものである必要があり、遺伝的能力評価とリンクさせた取組にしていく必要がある。

センターはオーエスキー病等の疾病清浄化のノウハウを持っているので、民間における疾病清浄化の取組を支援するようなこともやってほしい。

(3) センターと都道府県・民間との連携について

センターが中心となって県等と連携して系統造成を実施することを目的として、「広域系統造成検討会」を設置し、この検討会の中でどのように系統を造成するのか等について決めていくという取組にはおおむね賛成である。

県・民間連携による系統造成を開始するのであれば、スタートから民間に参加してもらい、民間の意見をよく考慮した系統にすれば、利用が広がる。

国内の種豚の能力が、海外のものに引けをとらなければ、皆国内から導入する。海外では官民一体となって能力向上に努めており、日本は遅れている。

系統造成を進めるに当り、民間に組み合わせ検定等に参加してほしい。情報を共有してセンターを頂点とするピラミッドを造ると良いのではないか。

このような連携した形で系統造成を行うのであれば、改良方向が一致することが重要であるので、雌型系統で取り組むことが望ましい。

これまで県等で造成した系統については、県外の民間に配布してもらえなかった。民間生産者に広く育種素材を供給してもらえなければ、民間は海外に育種素材を求めることになる。これだけ養豚農家戸数が減少した今、県内だけうまくいけばよいなどと言うことは絶対にあり得ない。国全体で協力し合う必要がある。

これまでの系統造成のように、改良目標に到達したら改良をやめるのではなく、生産性を高めるために、改良を継続することも検討してほしい。

良い豚、売れる豚を作るのが重要であり系統造成はその手段である。県、民間で同じ方向を向いて改良を進めることが重要。官はそれをまとめるリーダーシップを発揮し、体制作りを進めてほしい。

従来の系統造成の仕組みにこだわらず、途中世代であってもどんどん供給するなど柔軟に対応してほしい。

繁殖能力としては、小さくて弱い子豚がたくさん生まれても経営にプラスとはならないので、例えば11頭程度の産子数で、100%離乳を目標とするなど我が国の養豚産業に適した改良を考えていくことが重要である。また、共通のPCプログラムを作り、データを収集すれば効率的に改良を進めることが出来る。

(4) 遺伝的能力評価について

地域評価を進めることなどにより、評価値をより使いやすいものにして全国評価へと拡大していく取組を行っているところである。各県連携した広域系統造成が取り組まれたならば、血縁ブリッジの構築に貢献するだろう。

種豚場に種豚を選定に行っても、既に大きくなった雄は見るができるが、発育の途中経過がわからない。100kgの時にどのような能力評価だったのか情報を残しておいてほしい。また、肢蹄や体型等を写真などで残し提供してもらいたい。

遺伝的能力評価は選抜に利用されないと意味がない。精液販売している雄の能力をしっかりと把握できれば遺伝的能力評価の利用価値は上がる。AIセンターをもっと取り込む必要がある。

遺伝的能力評価値の利用が、どれだけ効果があるかをユーザーに分かり易く示すことが重要である。

今後F1をどのように能力評価するかが重要となってくる。

(5) その他

センターで希少品種の維持・供給を続けてほしい。

豚の遺伝子解析について、改良に利用できるように積極的に進めてほしい。

人材育成には時間がかかるので、豚関係者は意欲のある人が長期にわたって携わるようにすべき。また、育種関係者の教育にも力を入れるべき。

肉質分析を進めて、おいしい肉とはどのようなものか数値で表せるようにしてほしい。また、民間農場からの依頼に応じて肉質分析を実施してもらえないか。

繁殖能力の改良については妊娠中の飼養管理も確認して正確なデータを収集する必要がある。

現場の望むこと、消費者の要望をよく聞くことが必要。

これまでの系統造成は型にはまったものであった。これからの系統造成については、型にはめずもっと柔軟に考えるべき。現場で問題になっている疾病問題等に対応するためにも、生理繁殖、抗病性等いろんな分野の共同プロジェクトとして系統造成を進めていくべき。

国全体の能力向上はセンターが行うことが必要。高い改良目標を立てて、継続的に改良を進め、民間からほしがられるような種豚作りをするべき。

遺伝的能力評価に関しては、農場内で育種価を使うのが難しいから細かな説明がほしい。

遺伝的能力評価について、乳用牛等は評価した雄を使うことによって改良結果が見えてきた。豚は、肉豚が純粋種ではないため、純粋種の評価である現在の能力評価は肉豚には全く活用されていない。評価をどうやって肉豚まで活用するのかを示していく必要有り。また、評価したものを雄として利用しようにもA I普及率が低ければ利用しづらい。A I普及も同時に考える必要有り。

以上